

Title	<書評>Joëlle Hansel, Vladimir Jankélévitch : une Philosophie du Charme, Manucius, 2012
Author(s)	古怒田, 望人
Citation	年報人間科学. 39 P.107-P.112
Issue Date	2018-03-31
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/67886
DOI	10.18910/67886
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈書評〉

**Joëlle Hansel, *Vladimir Jankélévitch : une Philosophie du Charme*,
Manucius, 2012**

古怒田 望人

はじめに

本書は、ヘブライ大学教授、ジョエル・アンセルによって記されたウラジミール・ジャンケレヴィッチ哲学の入門的著作である。アンセルは、フランス、アメリカ、イスラエルにあるエマニュエル・レヴィナスの研究機関の創設メンバーとしてレヴィナスを中心としたフランス現代哲学と17世から18世紀のイタリアユダヤ思想の知の歴史にかんする研究を行っている。近年は、精力的にジャンケレヴィッチ哲学をフランス¹⁾やイスラエルで紹介しており、ジャンケレヴィッチ研究の最前線で活躍する研究者である。

本書でアンセルは20世紀のフランス哲学に大きな影響を残しながら、その広大で多様な哲学領域のために包括的に分析されてこなかったジャンケレヴィッチ哲学を「方法論」(第一章)、「形而上学」(第二章)、「道徳哲学」(第三章)、「音楽論」(第四章)、「ユダヤ思想」(第五章)という五つの観点から簡明に論じている。巻末には、ジャンケレヴィッチゆかりの思想家の説明と主要な概念説明も付けられており、格好の入門書といえる。

アンセルは本書を通して、ジャンケレヴィッチ哲学のフランス現代思想における立ち位置を想起させつつも、伝統哲学の昇華にとどまらないその思考のアクチュアリティを明らかにすることを目的としている(p.15)。

この営為の導きの糸としてアンセルが着目するのが、「自己性 *ipséité*」という「人間の人格の絶対的な価値」(p.15)と「パラドクス」である。主に道徳哲学、死の哲学、ベルクソン哲学の継承的哲学として扱われてきたジャンケレヴィッチ哲学を、アンセルは新たな観点からまとめ直していると言いえる。

以下、上記の本書の目的と中心概念を基に、本書をいくつかの観点から論じてみたい。

自己性という新たな存在の問い

「ジャンケレヴィッチの形而上学、道徳哲学、美学、これらは人格の絶対的な唯一性、その「自己性」をたたえている」(p.43)、こうアンセルが述べることから分かるように、本書でアンセルはジャンケレヴィッチ哲学をある種の主体性を基に分析する。

アンセルが特に注目するのが、「自己性について」と題された1939年の論文である。書籍化もされていないこの論文の分析から、アンセルはジャンケレヴィッチ哲学における「自己性」を明らかにする。

ジャンケレヴィッチにおいて「自己性」とは「人格としての私たちの実存の純粋で比較できない事実」を意味する(p.44)。アンセルが述べるようにこのようなカント的な絶対的人格観に基づいた主体概念(p.45)が、「自己性」なのである。

しかし、重要なことは、自己性が、量、質、時間、場所、関係性という伝統的存在論の「カテゴリー」の外部の「事実=コト le fait」であること、伝統的存在論とは「まったく異なった秩序 tout autre ordre」だということである(p.46,51)。すなわち、「存在しているという事実そのものは、わたしたちが誰であるか、わたしたちが何をなすかとは独立にひとつの価値をもつ」のだ(p.45)。あらゆるカテゴリー(=「何であるか」)の前提となるという意味で、この「存在しているという事実そのもの」としての自己性はすべての「価値の源泉」(ibid)だとされる。

この「自己性」の概念を具体的に理解するために、アンセルによるジャンケレヴィッチの死をめぐる考察の分析を参照したい。

国内では、ジャンケレヴィッチの死の哲学は死の人称性の差異を明らかにしたものと捉えられているが、実際には、核心はそこにはない。死の出来事が問題であるのは、死が、誰であるか(=カテゴリー)に関わらず、「自己性」という唯一、一回的な「誰か」が存在すると言う「事実」の消滅に関わるからである(厳密には、死はその「誰か」が「生きたという事実 fait-d'avoir-vécu」を無化することができないのだが)。

ジャンケレヴィッチは、マルティン・ハイデガーの死の省察を批判したドイツの哲学者、パウル＝ルイ・ランズベルグを参照しつつ、ハイデガーの存在論の死の分析に倫理的な死の分析を対置する(pp.67-68)。他者の死は、「人は死ぬ On meurt」ではなく、「『誰か』の死」なのだ。しかし、ここでジャンケレヴィッチがハイデガーと袖を分かつのは死の人称性の理解の差異ではなく、存在の問いに対する両者の刷新の仕方の差異によっている。前者が、「自己性」という唯一性をモデルとした存在の問いを展開するのに対して、後者は存在一般に関する問いを展開する。本書でアンセルは、「自己性」をもとにジャンケレヴィッチの諸哲学をひもとくことで、その哲学の存在の問いの特異性を明らかにする。

パラドクスの哲学、あるいは哲学というパラドクス

「器官-障害 organe-obstacle」、「消失しつつある現出 apparition-disparaisante」、「不可能的で必然的 impossible-nécessaire」といったパラドクサルな概念をもちいてジャンケレヴィッチは自らの哲学を展開した。

アンセルによれば、このような「総合なき弁証法」は否定的なものではなく、「諸価値の世界内のものとしてのリアルに固有のもろもろのニュアンスの無限さ」、「体験の複数性」を反映する、豊饒なものである(p.41)。ジャンケレヴィッチは諸々のパラドクスを孕んだ議論を絶えず展開することで、独断論に陥らず、現実の繊細なりアティーを哲学の領野に持ち込んだのである。

さらにアンセルは、ジャンケレヴィッチが「哲学する「仕方」」そのものとしてこのパラドクスを捉える(p.41)。

ジャンケレヴィッチは、ベルクソンに倣い、哲学する仕方を「直観」と呼ぶ。そして、この直観そのものがパラドクスであると語る。

アンセルは、ジャンケレヴィッチがこの哲学する仕方とパラドクスとの関係を説明する為に用いる「蝶と炎」の比喩を引用している(p.37)。蝶が炎を直観するためには、炎のうちで自らを消尽させなければならない、しかし、その瞬間、炎を直観する蝶の存在は無に帰す。このように直観とは「存在することなく知るか、あるいは知ることなく存在するか」というパラドクサルな緊張関係からなっている。

それゆえ、アンセルの分析によれば、ジャンケレヴィッチにとってパラドクスは哲学する仕方の「ひとつ」ではなく、「哲学そのもの」なのである。

そしてこのパラドクスという哲学が特に垣間見られるのが、道徳哲学であるとアンセルは語る(p.41)。

行為論的道徳哲学

ジャンケレヴィッチは、「哲学の第一問題」を「道徳哲学」とみなす(p.83)。ここでジャンケレヴィッチが、存在論そのものの批判へと移っていることをアンセルは示す。

アンセルによれば、「存在するか、あるいは存在しないか」という、存在論的な二者択一とは異なった第三の道をジャンケレヴィッチは提示しているという(p.58)。それは、「なすこと Faire」という行為の、「あること」という存在に対する形而上学的な優位性である。ある面でジャンケレヴィッチの存在の問いの刷新は、「存在(論)の彼方」へと向かうのである²⁾。

この「なすこと」の哲学は、分析哲学などでなされる具体的な行為の分析ではなく、行為という現象そのものの構造の分析である。

まず、「なすことは」、生じると同時に消えてしまう瞬間 instant になされる言う意味で、「存在と非存在」の間にあるパラドクサルな出来事である(pp.58-59)。そして、このために「なすこと」は、存在論の二者択一に還元されることのない「ほとんど無 presque-rien」と呼ばれる。

次に、「なすこと」はジャンケレヴィッチにおいて道徳的出来事そのものである。それゆえ、「哲学の第一問題」は存在論ではなく、道徳哲学なのだ。

しかし、この「道徳」は素朴なモラリズムではない。第一に、ジャンケレヴィッチは、ジンメル論を基に(p.62)、時間の本質としての不可逆性を説く。そして、その不可逆性のために行為は「取り消せないこと irrévocable」である。つまり、時間が不可逆であるために、行為 faire のなしたこと fait はいかなることであれ取り消せない道徳的に唯一なものである(p.64)。「なすこと」=行為が根本的に道徳的であるのは、時間の形而上学的な構造そのものによっているのだ。

ただここで、ひとつのパラドクスが生じる。時間の不可逆性は「必然的なもの」だが、取り消せない行為自体は、行為者の決定による限りで「偶然的なもの contigence」である(p.80)。つまり、「なすこと」の道徳性は「必然的で偶然」というパラドクサルなものである。それゆえ、ジャンケレヴィッチは人間を「出来損ないの魔法使い demi-sorcier」と呼ぶ(ibid)。存在論を越える出来事それ自体もまたパラドクスなのである。

ジャンケレヴィッチ哲学と諸哲学

これまでみてきたように、20世紀フランスにおけるヘーゲルブームと実存主義の勃興のなかで、ジャンケレヴィッチ哲学はこれらの潮流に対するアンチテーゼ的な哲学であったことがみえてくる。自己性と「なすこと」は実存主義の理論構造の転換であるし、パラドクスを哲学と見なす方法論は、弁証法的ヘーゲル主義への批判となる。

このようなジャンケレヴィッチの哲学の形成において、アンセルが目にするのは、シェリングである。

30年代から40年代のフランスにおいて、ハイデガー存在論の輸入だけではなく、ルイ・ラヴェルの『全的現前』(1934)のように、新たな存在の問いが沸き起こっていた。

しかし、ジャンケレヴィッチは、これらの潮流とも異なった存在の問いを展開していた。そして、そこには、シェリングが提起した「なんであるかWas」＝「何性quiddité」に対する「あるというコトDas」＝「コト性quoddité」の優位性を基にした哲学が契機となっている。このシェリングの区別に基づいて、「存在する事実＝コト」を起点とした自己性というジャンケレヴィッチ哲学における存在の問いが形成されたとアンセルは見なす(pp.52-53)。

さらに、この「コト性」への着目は、一つの哲学的邂逅へと導いたことをアンセルは指摘する。それはレヴィナスの「ある ilya」との邂逅である(pp.53-54)。ジャンケレヴィッチは自らの概念である「コト性」が、「何」と規定できないという意味で、レヴィナスが40年代に提起した「ある ilya」と密接な関係をもつことを『第一哲学』(1953)において明示している³⁾。

しかし、アンセルは、レヴィナスが非人称の出来事というネガティブな文脈で「ある」を用いているのに対して、ジャンケレヴィッチは、「ある」の無規定性を出来事の到来の無規定性、「持続的なイノベーション」、つまり「なすこと」のイマージュとしてポジティブな文脈で用いられている点で差異があると指摘する(p.56)。

このアンセルの主張には、疑問を提示できる。確かに40年代のレヴィナスは「ある」をネガティブに扱ったが、60年代において次の節で述べるジャンケレヴィッチの道徳的行為論の核となる「愛」から、「ある」と関係させつつ、存在論の超克がなされている⁴⁾。ここには、レヴィナスがジャンケレヴィッチの「ある」解釈をとおして、新たな観点から「ある」を捉えた痕跡がある。アンセルの指摘を踏まえつつも、より密接な「ある」をめぐるジャンケレヴィッチとレヴィナスの関係性を考察する必要があるだろう。

おわりに代えて—パラドクスという「哲学への誘惑」

最後に、これまでのジャンケレヴィッチ哲学の概念と思考法が提示するひとつの問題系に焦点をあてたい。

アンセルはジャンケレヴィッチの道徳論における「複数の絶対」という価値のパラドクスに言及している(p.90)。これは、各人が「自己性」という代替不可能な価値を有するがゆえに衝突するというパラドクスだと言える。ジャンケレヴィッチ哲学の根幹そのものがパラドクスなのだ。

アンセルによれば、このパラドクスを断つ出来事が「愛」という道徳的行為である。なぜなら、愛とは「価値をもつのではなく、『価値それ自体』であり、愛こそが「諸価値の価値をなす」からだ(p.91)。愛とい

う「行為」は、相対する「複数の絶対」というパラドクスを越えて、自己の自己性を犠牲にした倫理という絶対的な価値を生むのだ。

ところで、アンセルは、フッサールの現象学に対置させつつ、ジャンケレヴィッチの愛には「触発」や「情動」という契機がない事を強調している。あくまでもジャンケレヴィッチにおいて、「愛」は、「戒律」、「無条件のただ一つの命法」というカント的な出来事なのである(p.92)。それゆえ、愛と自由な行為がなす悪とのあいだの動揺というパラドクスに言及しつつも、愛という絶対的道德的行為がこの愛と悪のパラドクスを断つものになるとアンセルは結論付ける(p.136)。

だが、アンセルのこの結論そのものが、この著作をとおしてある種のパラドクスに巻き込まれている。

アンセルは、ジャンケレヴィッチの対人関係論を「似ていて－異なる(似ていない)semblable-différent(dissemblable)」というパラドクスからなると論じる(pp.97-98)。愛される他者は「わたし自身のようにである」と同時に「わたし『である』わけではない」。さらに、ジャンケレヴィッチは反ユダヤ主義が、ユダヤ人を、ヨーロッパ人としては自らと「似ている」から近く無視できず、ユダヤ性を持つ限りで「異なる」者として排除するというこのパラドクスからなっていると論じる(pp.130-132)。このように愛が生じる対人関係は、それ自体がパラドクスであり、愛が断ち切るパラドクスと切り離すことができない。

このようなパラドクスを示すかのように、ジャンケレヴィッチが愛の議論の基盤とするフランスの神学者、フェヌロン純愛の議論を、レオ・ベルサーニはベアバッカー（コンドームをつけずに乱交し自らのコミュニティーにHIVを意図的に広げるゲイの人々）の自己のナルシズムの破壊という意味での自己犠牲的な愛に転用している⁵⁾。愛の出来事そのものが、様々な「似ていて－異なる」近くて遠い対人関係において擾乱される可能性を孕んでいるのである。

アンセルはこの問題に対してははっきりとした回答を本書において与えてはいない。

私は、あえてアンセルはこのようなパラドクサルな問題の解決を試みないのだと考える。というのも、本書の副題が示すように、「魅惑 charme」の哲学としてジャンケレヴィッチ哲学を提示すること、アンセルの言葉を借りれば、「もろもろのパラドクスのパラドクスとしての誘惑者」(p.137)ジャンケレヴィッチを描き出すことが本書の目的だからである。

アンセルは、簡明にジャンケレヴィッチ哲学を本書において提示すると共に、その哲学に孕まれたパラドクスそのものを再演してみせることで、読者をジャンケレヴィッチ哲学が醸し出す「魅惑」へと誘っているのである。

以上

注

- 1) たとえば、“Bergson Jankélévitch Levinas” Sous la direction de Flora Bastiani MANUCIUS(2017)に掲載されたアンセルの論文“《Élection》 et 《exception》 :l’unicité du moi selon Levinas et Jankélévitch”を参照。
- 2) この点に関しては『現代思想 3月臨時増刊号』「総特集 レヴィナス」青土社(2012)における合田正人と村上靖彦の対談を参照されたい。

3) “Philosophie première” Puf(1953),145

4) ジェラルール・ベンスーサン 「両義性と二元性ーレヴィナスにおけるエロスのなものについて」(合田正人編『顔と
の彼方』知泉書館 [2014] より) を参照。

5) レオ・バルサーニ、アダム・フィリップス 『親密性』 檜垣立哉 宮澤由歌訳 洛北出版 (2008),62-100